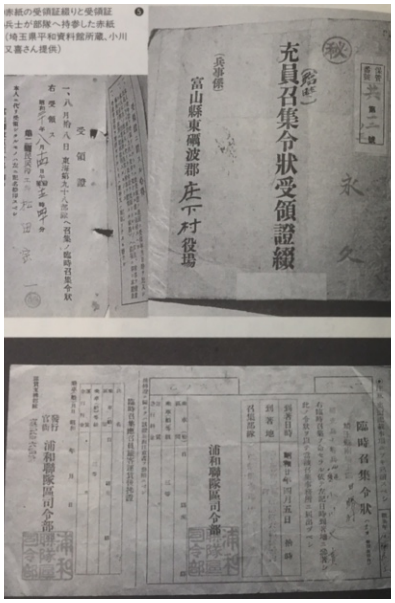
「赤紙」と父

最近なんだか、戦争の時代から戦後まもない頃の父と母のことを考えることが多い。そんな折、小澤眞人・NHK 取材班『赤紙』創元社、1997 年を手にした。プロローグから　―　召集令状、通称「赤紙」。終戦まで多くの人々を戦場に送ったのが、一枚の赤い令状であったことは、よく知られている。どこからともなく不意に舞い込み、家族を驚かせ、やがて夫を、父を、息子を、兄、弟を家族と引き離す。そんな光景が日常的に日本全国で見られた時代は、そんなに遠い昔ではない。わずか 50 数年前まで、日本国民の誰もが、いつ来るかも知れない赤紙におびえる日々を過ごしてきた。‥‥国家の命令が紙一枚によって国民に伝えられ、生命を左右した時代。国民にとっての戦場への入り口となった赤紙は、どのようなものだったのだろうか。

本書は富山県東砺波郡庄下村役場の兵事係・出分重信さんにより奇跡的に残った兵事資料など、戦時下の数多くの資料や聞き取りをもとにしている。初めて知ることも多く、父を思い起こしながら読みすすんだ。写真下は「赤紙の受領証綴りと受領証」「兵士が部隊へ持参した赤紙」。



私の父にも赤紙が来た。父は大正 5(1916)年に生まれ、酒屋に「奉公」したあと国鉄職員になった。名古屋機関区に勤めていた昭和 17(1942)年の夏、母と結婚した。父が残した未完の『自叙伝』には、こう記してある。抜粋して語句の修正などした。

「同僚からは新婚生活をヒヤかされたりしたが、何をするにも楽しくて、恐らく召集令状がくるまでが、長い人生のうちで一番楽しかった時代であったような気がする。こうした楽しい思い出も，翌 18 年 2 月、臨時召集という赤紙を最後に、自分の環境は一変した。応召の報は家から届いた。2 月 18 日中部 13 部隊へ集合せよとの令状であった。13 日に届いて、5 日間しかない。仕事の引き継ぎをしたが、もちろん十分なことはできない。心はすでに軍隊のことばかりである。

いよいよ入隊の日がきた。前日床屋で長い間の長髪を坊主頭に刈り、朝を迎える。確か 9 時の入隊だったと思う。7 時頃には表は見送りの人で一杯であった。出発の時刻になったので、大勢の見送りの人に対して出生後の家族を頼む旨の挨拶をする。‥‥」

母と結婚して半年余りの臨時招集という赤紙。その時、母は妊娠 5 ヶ月で大きなお腹をしていた。『赤紙』を読み、父への一枚の赤紙による召集、入隊までの動きの一部が分った。引き続きレポートしていきたい。　（2017 年 9 月 16 日）